

## 第3章 夏空に咲く



大正池から穂高連峰を望む(長野県松本市)。

## 【 I 】 夏空に映える木の花

夏に咲く花はどれも花期が長い。サルスベリは百日も咲くことから百日紅と書く。夾竹桃も秋まで咲き続ける。槿や芙蓉は一日花であるにもかかわらず、夏じゅう咲き続けて休むことはない。どれも常夏の国から日本に渡来したもので、ハイビスカスやデイゴなどは、ハワイなどでは一年じゅう咲いている。もともと四季の区別のない南方の植物は、新芽が伸びるごとに花を咲かせる仕組みになっているのだろう。このことは南方の材木に関してもいえることで、一年中成長を続けるから年輪がない。樹木の年輪は厳しい冬をすごして春を無事に迎えた証でもあるのだ。最近では『年輪年代法』と言って、この年輪の間隔を細かく分析することによって、木材が伐採された時代や、建造物が建設された時代を逆算する方法も確立されている。

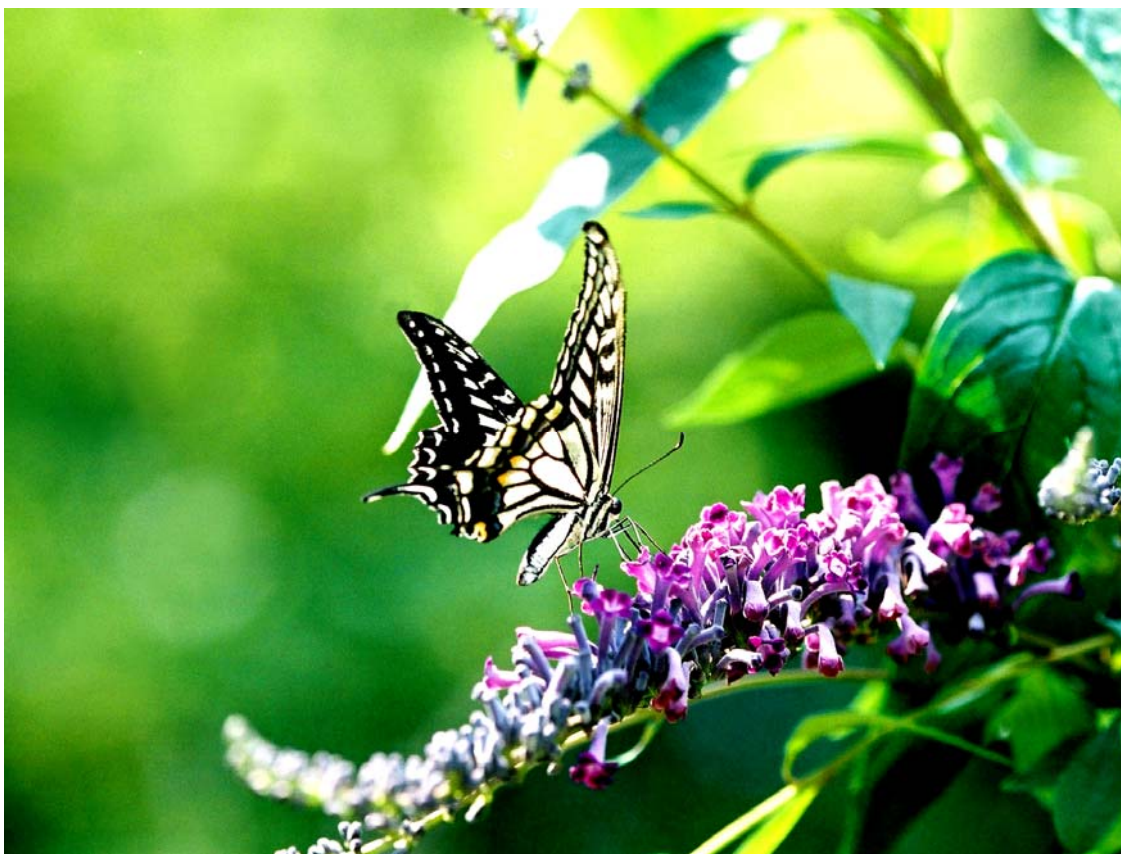
夏に花を咲かせる花木の花芽が形成されるのは、まさに夏そのもので、枝が伸びるとその先に必ず花芽がつくようになっており、生長が続く限り花も咲き続ける。これが四季のはっきりとした地域では、秋へと向かい、温度や日照時間が短くなってくると、やがて花を開くのをやめて、冬を迎える準備をするわけである。

我々がよく知っている植物は、ほとんどが春に花を咲かせるが、その花芽は夏の暑い盛りに準備される。この季節に温度が低かったりすると、翌年の花が少なかったり、小さかったりすることも多い。春先に出されるスギ花粉情報も、前年の夏の気候に基づいている。夏は人間にとっては暑くて辛い日々であっても、植物にとっては翌年の花を準備するための、なくてはならない季節でもあるのだ。

一般的に夏、花を咲かせ続ける植物の多くのは、南方を生まれ故郷としており、冬は葉を落したり、地中で生活するものも少なくない。これとは反対に春咲きの草花の故郷は、比較的寒いところを原産地とし、耐寒性の強いものが多い。夏の暑い季節には葉や茎を枯らして、大地の中で眠るようにして暑さを凌いでいるものも少なくない。水仙しかり、ヒヤシンスしかり、チューリップも同様である。この地上に生活する植物は、どれもこれも暑さ寒さに対応しながら今日まで種を保ち続け、進化を遂げてきたのである。

※被子植物と裸子植物＝花が咲く植物はどれも種子を作る。受粉が終わって種子を作るところを胚珠とっており、この胚珠が子房で包まれている植物を被子植物という。これに対してマツやイチョウ、ソテツのように子房がなく胚珠がむき出しになっているものを裸子植物という。一般的には裸子植物のほうが進化した植物ということができる。





ブッドレアに来たアゲハチョウ(都内文京区)と、帽子に来たキベリタテハ(長野県川上村)。

この項に記されている植物のリスト
------------------

【I】夏空に映える木の花	03-01-00-1
1) ナツツバキ=夏椿	03-01-01-1
2) サルスベリ=百日紅	03-01-02-1
3) キョウチクトウ=夾竹桃	03-01-03-1
4) ネム=合歓木	03-01-04-1
5) デイゴ=梯姑	03-01-05-1
6) ブーゲンビレア	03-01-06-1
7) ブッドレア	03-01-07-1
8) ハイビスカス	03-01-08-1
9) ムクゲ=木槿	03-01-09-1
10) フヨウ=芙蓉	03-01-10-1
11) ノウゼンカズラ=凌雲花	03-01-11-1
12) ジャスミンとソケイ=素馨	03-01-12-1

<a href="#">目次に戻る</a>
-----------------------